氏　　名	劉　藍蔚
学　位　の　種　類	博士（文学）
学位授与年月日	２０２３年3月３１日
学　位　論　文　名	宋代四川社会研究 ―以国家和地方社会的协商与交流为线索―
論文審査委員　　主査	渡辺　健哉
副査	平田　茂樹
副査	張　新民
副査	（外部委員）寧夏大学西夏学研究院副研究員　許偉偉

論文内容の要旨

序章では、本論文の研究視角、研究対象及び研究方法について述べた。近年の宋代史研究のトピックの一つとして「地域社会」をめぐる議論がある。多くの研究者が地域社会の人口移住、婚姻の問題、地域経済、文化、政治など各方面について議論を展開したが、州や県あるいは村落に注目が集まり、広域的な地域、例えば四川、福建、江西などの広域の「路」に着目して研究をする必要がある。つまり、広域の地域史研究の視点に立ち、地域を統合する仕組みを考えつつ、地域社会を研究する必要があると考えた。

宋（９６０―１２７９）が成立してから、遼（９１６―１１２５）、西夏（１０３８―１２２７）、金（１１１５―１２３４）、モンゴル（１２６０―１３６８）との戦争が続いた。特に南宋に入ると、四川地域（本論文が検討する四川は現代の行政区画の四川ではなく、成都府路、潼川府路、利州路、夔州路の四路を包含する地域を指す）が軍事拠点・財政拠点となり、官員の人事、科挙、財政・物流などの面で特殊な状況が出現した。

こうした特殊な状況は、四川社会にどのような影響を与え、地方社会と国家の関係にいかに反映されているのだろうか。この課題を解決すべく、国家と地方社会の間の「交渉」（この場合の交渉とは統制、対立、調整など様々な覬ぎ合いの方向のベクトルを指す）と「交流」を念頭に入れながら、先賢祠、生祠、四川制置使・四川宣撫使をケーススタディとして考察を行った。

第一章「宋代四川社会和先贤祠、先贤祭祀」（「宋代の四川社会と先賢祠・先賢祭祀」）では、宋代の先賢祠を分析した。宋代になると各地に先賢、名儒、官員などを祭祀する先賢祠が建てられた。他の地域に比べて四川では、

すぐれた官員のための祠堂を積極的に建設し、祭祀を行ったことに注目し、四川の先賢祠に関する記録を分析した。その結果、以下のことを明らかにした。（1）先賢祭祀の対象は主に当地に勤務した官員であった。しかしながら時間の推移に従って、四川の地元の士人、自らの先祖、道学の先賢などを祭祀対象とするようになった。（2）祭祀の場所は官衙や治所などが主であるが、学校、仏寺、道観、先賢のかつての居住地、観光名勝、あるいは治績の周辺にも現れるようになった。（3）先賢の肖像画を使い、祠堂などの空間で祭祀を行った。先賢の人数に応じて三賢祠や四賢祠、五賢祠などもあった。時間の経過とともに先賢が加わり、人数が増えることもあった。

総じていうと、四川では祭祀対象、祭祀場所、祭祀方式などが北宋から南宋にかけて発展し、多様化した。さらに、北宋時代より、中央から派遣されてきた「奉使来者」や「部使者」などの四川以外の士人も、尊崇すべき対象として先賢祭祀を行なった。こうした先賢を祭祀する空間が形成され、すべての「奉使来者」について成都天慶観の仙遊閣で祭祀を行った。中央から派遣されてきた外来士人を尊崇する共同意識が生まれる一方、南宋に入ると、地元の有名人を祭祀対象とする意識も現れるようになった。地方士人が先賢祠を建立し、それによって四川と国家の関係が強化される一方、国家も先賢祠を通じて、地方への教化・干渉を強化していった。

第二章「宋代四川社会和生祠」（「宋代の四川社会と生祠」）では、宋代の生祠について、宋人が書いた生祠記、墓誌銘、行状などに関する史料を用いて分析を行った。その結果、次のような結論が得られた。（1）宋代の生祠の祭祀対象は路、州、府、県の官員であるが、その中で最も多いのは路レベルの官員であった。（2）生祠を建立する主導者は地元の名望がある人、または道士、僧侶などが一般的であった。地方官が主導することもあった。（3）生祠建立の目的は、地方官が軍事上または民政上で善政、徳政があり、地元の人が報恩、祈福、留任を祈願するなどの目的で生祠を建立した。そのため、祭祀の場所としては、学校、仏寺、道観のほかに、交通の発達したところも多かった。北宋期には四川地域に生祠がほとんどなかったが、南宋に入ると、四川制置使・四川宣撫使の生祠が多くなった。生祠の建立が全国的に流行するなか、とりわけ四川で急増するのは、軍事、民政、財政の各権力が四川制置使・四川宣撫使に掌握されたことを意味し、国家の地方への支配力が弱まったことを示している。

第三章「从中央和地方的评价看四川制置使、四川宣抚使」（「中央と地方の評価から見た四川制置使・四川宣撫使」）では、中央から下された制・詔や、四川制置使・四川宣撫使の墓誌銘・神道碑・行状・祭文などの史料を整理・分析することによって、中央と地方における四川制置使・四川宣撫使の「形象」を明らかにした。史料の分析を通じ、以下のことが明らかとなった。（1）四川制置使・四川宣撫使の本籍は南人が北人よりも多かった。そのうち四川出身の人が四川制置使や四川宣撫使となる事例は多くなかった。（2）文人が多いのは、武将を抑制する政策の反映と見られる。（3）中央の四川制置使、四川宣撫使に対する期待、対金・対モンゴル戦争などに深く影響されていた。そのため、中央からの評価も異なる。その例として、鄭剛中と余玠を分析した。

第四章「从中央和地方的评价看南宋后期四川宣抚使、四川制置使的模范――安丙、余玠」（「中央と地方の評価から見た南宋後期の四川制置使・四川宣撫使の規範―安丙・余玠」）では、四川宣撫使（四川制置大使）の安丙と四川制置使の余玠を例として、第三章で分析した内容にもとづき、地方と中央の評価が反映された四川社会の地方と中央の関係を分析した。ここで注目すべきは四川には安丙の生祠が四つあり、筆者の調査にもとづけば、一人につき四つも生祠があるという現象は他では確認できない。

以上、四章にわたり考察した内容を通じて、序章で提出した課題を明らかにした。

まず国家の政策は四川社会にどのような影響を与えたのか。（1）北宋初期から、四川では中央から派遣された外来士人を尊崇する共同意識が形成された。また、四川士人ネットワークが全国的に展開した。（2）軍事拠点と

なった四川では、四川制置使・四川宣撫使の権力が肥大化し、四川士人の人事や、考課に大きな影響を及ぼした。

また地方社会と国家の関係における様々な「交渉」（統制、対立、調整などを含む）と交流については以下のように整理できる。（1）国家が地方社会へ行う様々な干渉が存在した。例えば、国家は先賢祠を通じて規範を立て、地方への教化を行う一方、四川地域の民衆による官員のための生祠建立を禁止していた。この禁令によって、他地域では生祠を建立した事例が少なくなかったにもかかわらず、北宋を通じて四川では生祠がほとんど見当たらない。（2）国家と地方社会は互いに依存したり、鬩ぎ合いをしていた。具体的には、中央が四川制置使・四川宣撫使を用いて、地方の武将勢力、外敵の侵入、地方勢力を統制するため、彼らに権力を与え続ける一方、権力の拡大した四川制置使・四川宣撫使は祖宗の法に基づく宋朝の基本方針に反することともなった。

本論文は宋代四川社会についての考察を行ったが、明白になっていない課題も数多く残されている。第一は、南宋において財政に関する四つの総領所の一つである四川総領所が置かれるなど、四川は財政の大きな拠点でもあり、軍事上の重要拠点でもあった。本論文では第三章で財政について少し触れたが、この点はより深く考察する必要がある。第二は、四川地域が中央から離れた、周辺と言えるのに対して、宋代には当然ながら中心地域も存在している。例えば、同じ総領所、制置使・宣撫使を設けていた淮東・淮西などの地域が、四川とどのように異なっているのか。つまり、四川の特殊性をさらに明白にするための課題も残されている。最後には、本論文では記、墓誌銘、神道碑、行状、祭文、制、詔等の史料を使用したが、序、題跋、詩、手紙を利用することも今後求められる。こうした反省に立って、宋代四川社会の構造を深く解明することを今後の課題とする。

論文審査結果の要旨

本論文「宋代四川社会研究――以国家和地方社会的协商与交流为线索――」（「宋代四川社会研究――国家と地方社会の交渉と交流を手掛かりとして――」）は、宋代の四川地区を研究対象とし、先賢祠・生祠・四川制置使・四川宣撫使の分析を通じて、宋代における四川社会の実態について解明したものである。本論文が学界に対して果たす学術的意義について四点ほど言及する。

（1）「広域地方」というパースペクティブ。本論文で扱う四川は、周囲と隔絶した特殊な地域として知られているが、とりわけ宋代においては、「周辺」に位置する空間として、中央とは異なる「八路定差法」「類省試」などの科挙、官僚人事に関わる制度や、四川社会独特の文化、風俗が存在した。また、南宋期に至ると、四川の軍政、財政を統括し、分権的な構造を作り出した四川制置司、四川総領所の存在も見逃すわけにはいかない。したがって四川を「広域地方」と捉えて検討することは、宋代社会の多様性や中央と地方の関係性を考えるうえで極めて有効な視点といえる。

（2）「協商」という方法概念にもとづく分析。国家と社会の関係を二元対立的に捉えるのではなく、地域社会を国家側と地域側の、両者のせめぎあいの構造から把握した。そこには中間領域ともいうべき空間が存在したことになり、より多元的な構造から四川社会を把握した点に本論文の大きな特徴がある。この「協商」という方法概念を利用したことにより、新たな研究視角を学界に提供した。

（3）「計量分析」と「比較」の視点。本論文では近年になって陸続と公表される大規模なデータベースを駆使して、大量の史料を整理して、「計量分析」を行った。具体的には四川の地方志を中心に据えて四川社会の傾向性を浮き彫りにしつつ、その傾向性を確認するため、個人文集に収録される墓誌名、行状、神道碑、祭文といった

個人の評価に関わる伝記史料、及び記、序、跋など史料を組み合わせるという手法を取り、それが本論文の説得力をもたらしている。他の地域にも適合できる可能性のある方法論を提示したといえる。

（4）「先賢祠」「生祠」「制置使」「宣撫使」の分析。一見、関係性が不明瞭な印象を抱くこれら四つの対象が、分析を進めていくことで、密接に結びついていることが見出しえた。前二者の祭祀施設では「制置使」「宣撫使」を祭祀することが多く、これらはいわば外来の派遣官僚であり、それらの評価から、国家側が四川をどのように把握していたのか、地方社会側が外来派遣官僚をどのように評価し、彼らとどのように「協商」もしくは「交流」していたのか、その様相を分析することにより、宋代の「中央」と「周辺」の関係が絶えず変化していたことが解明された。「先賢祠」「生祠」の両方とも南宋時代に急増し、その対象が南宋期になって常置化する制置司、宣撫司であったことを明らかにしたが、南宋四川社会の変容の実像がこうした祭祀空間に明瞭に反映される点が確認された。

以上のように、本論文は当該時期の国家と地域の関係を考える上で、複数の視点を導入することで、いくつかの成果をあげたが、不充分な点もないわけではない。たとえば、本論文で解明された事象を改めて歴史的推移に位置づけたり、先行研究と付き合わせることにより、また新たな展望が開けていく可能性が残されている。また、今回は十分に検討しきれなかった筆記史料なども検討対象とすれば、新たな論点を提示できる余地もあろう。しかし、こうした点は、引き続き研究を重ねることによって解消されるものであり、本論文の価値を損なうものではない。

以上の所見により、本論文は大阪市立大学博士（文学）の学位を授与するに値すると認められる。